

刊行にあたって

混成アジア映画研究会は、混成性(混血性と越境性)に注目して、東南アジア映画を楽しむことを通じて東南アジア社会について語り、東南アジア社会への理解を深めることで東南アジア映画をさらに楽しむことを目指す研究会です。メンバーのほとんどが映画や映像の専門家ではなく、東南アジアの各国を対象に、現地に長期滞在して現地語と現地事情に通じてその社会について研究している地域研究者です。

多民族社会である東南アジアで、混血性と越境性は、常に外から多様なものを取り入れることで社会が持つ潜在力を高める契機になると歓迎される一方で、社会全体のまとまりを損ねる原因になりかねないと警戒されてきました。そのため、東南アジアのどの国でも、少数派を社会にどのように位置づけるかに頭を悩ませてきました。

現在はそれぞれの国に分かれていても、国境を越えて民間伝承が共有されていることも珍しくなく、ある国の少数派が隣の国では多数派であることも多いため、国ごとに少数派を多数派に同化させればよいということにはなりません。

少数派は、多数派と一緒にの国に入ったことで、それまでの自分たちの考え方ややり方が通用しなくなって不便になりますが、部分的に多数派に合わせてつても、多数派も少数派も納得する新しい考え方ややり方を一緒に作っていきたいという臨み方をするでしょう。しかし多数派から見れば、自分たちが慣れ親しんだ考え方ややり方に少数派が早く慣れてくれればよいという考え方になりかねず、そうすると多数派と少数派のすれ違いによる溝が解消されないままになってしまいます。溝が大きくなりすぎると、政治的な立場の違いのため、暴力的に相手を排斥しようとする事態に発展することもあります。

現実世界にはさまざまな理不尽があり、人びとを互いに対立させます。このようにできた社会の亀裂を修復するには、過去に抱いた理不尽な思いを解消しなければなりません。そのためには過去に起こったことを語ることも必要になりますが、「語る」と言っても、実際に言葉で語れるものもあれば、言葉では語りにくいものもあります。言葉にしづらいことを伝える上で、表情や仕草や伴奏などによってセリフと違うメッセージを伝えることができる映像は有効な手段です。過去のできごとや共通の物語を共有する上で、映像はとて優れたメディアです。

ただし、過去のできごとや共通の物語を語ることで、対立していた人びとがただちに和解し、社会の亀裂が修復されるとは限りません。複合的なメディアである映像に

は、作り手が意図しなかったものが映りこんでしまうことがあり、送り手が意図したのと異なるメッセージが受け手に伝わってしまうことがあるためです。

それでも、多数派と少数派がどちらも納得する考え方ややり方を一緒に作っていくためには、過去のできごとや共通の物語を語ることは続けられるべきでしょう。その際に肝心なのは、物語をどのように語るかであり、それをどのように解釈するかということです。これは映像を通じた物語や解釈に限りません。テッド・チャンが『息吹』で書いたように、もし私たちの人生が造物主の語る物語であるなら、私たちはその聞き手であると同時に登場人物でもあり、そうした物語を生きることによって教訓を学ぶのです。物語をどう語り、どう解釈するかを考える上でも、映像(とりわけ映画)を観て、その内容について他の人たちと話をすることはとても大切です。

最近では日本でも映画祭や劇場公開によって東南アジアの映画に触れる機会が増えてきました。背景が異なるさまざまな地域の映画が観られるようになってきたのは喜ばしいことです。今後は、映画を観た後でその内容について話をする機会がさらに増えていくとよいと思います。

混成アジア映画研究会では、映画を通じて東南アジア社会への理解を深め、東南アジア社会への理解を深めることで映画がより愉しくなるような対話の素材として、東南アジア各国の現地語と現地事情に通じた研究会メンバーが国・地域ごとに映画を紹介する「シリーズ 混成アジア映画の海」の刊行を始めました。2019年に刊行された第1巻の『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界——人とその作品、継承者たち』に続き、第2巻以降の刊行準備も進んでおり、近いうちに書店に並ぶようになると思います。

混成アジア映画研究会は、東南アジアの映画を対象として、日本語字幕の作成、上映会・シンポジウムの開催、映画と社会に関する記事執筆を行っています。

日本語字幕の作成については、研究会メンバーが紹介したい映画を選んで、社会・文化的背景を踏まえて日本語字幕を作成しています。2019年度には『アット・ザ・ホライズン』(ラオス)の日本語字幕が加わりました。

日本語字幕を作成した作品は、国際交流基金アジアセンターと共催の上映会・シンポジウムや、京都大学ビジュアル・ドキュメンタリー・プロジェクト(VDP)と共催の上映会などで上映とディスカッションを行っているほか、学会や大学による上映会にも提供しています。

上映会・シンポジウムについては、毎年7月末にヤスミン・アフマド監督追悼の上映

会「わすれな月」を京都で開催しています。毎年3月には大阪アジア映画祭との共催で公開シンポジウムを開催しています。

映画と社会に関する記事執筆については、研究会メンバーが毎年1月と7月に研究会Webサイトで「いま語りたい映画」を紹介しているほか、毎年3月の大阪アジア映画祭との共催シンポジウムに合わせてディスカッションペーパーを刊行・配布しています。2019年から「シリーズ 混成アジア映画の海」の刊行を始めたことは紹介した通りです。

ここに挙げたもの以外を含めて、混成アジア映画研究会の活動は研究会Webサイトで紹介していますので、そちらもご覧ください。

混成アジア映画研究会の公開シンポジウム・セミナーの開催にあたっては、国際交流基金アジアセンター、大阪アジア映画祭、国立国際美術館のご支援を賜りました。研究会の活動にご理解とご協力を下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所

山本 博之